

西日本のカマド

谷 旬

1. はじめに

今回も相変わらず「作り付けカマド（以下カマド）」の話である。さる9月5・6日に和歌山市で開催された、第32回埋蔵文化財研究集会「古墳時代の竈を考える」に参加させていただいた折りに、九阪（西日本の研究者グループの通称）のみなさんの食欲なまでの熱心さに圧倒された。

その際に配布された2,166頁におよぶ膨大な資料集（註1）を目にし、また「竈研究の記念すべき第1日」と話された水野正好氏の講演をお聞きし、カマドの本場を自負していた筆者としては恥じいるとともに「これは何かやらなければ」と感じいった次第である。

とはいっても、各地域の土器編年にうとい筆者である。これだけの資料を並べて、うんぬんするには力不足は明瞭である。ここでは、西日本のカマドを概観し、研修の報告としたい。

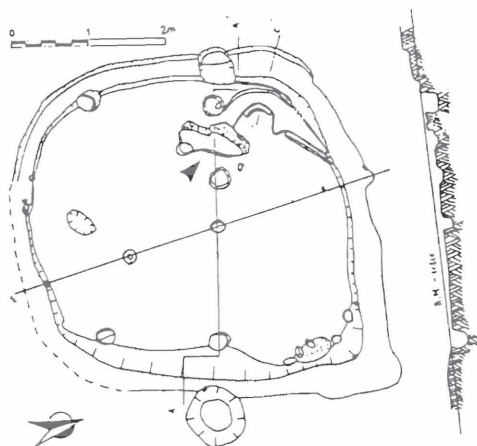
2. カマドのルーツ

今回の資料および報告のなかには中国大陸と朝鮮半島の事例も多く紹介された。

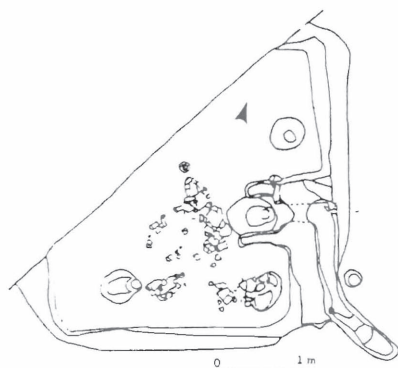
大陸では陶灶や甕形明器などとよばれるものが置竈の原形とされており、新石器時代からみられる。作り付けカマドの例も殷代や西周代の壁灶があり、渡辺芳郎氏の発表要旨に掲載された写真でみる限りかなりしっかりとした構造、つまりは我々のよく目にするカマドであることがわかる。

半島では炉形土器といわれる置竈のほか、竪穴内にカマドを持つ例があり、本文中で高正龍氏は原三国時代（3世紀頃）まで遡る可能性を指摘している。

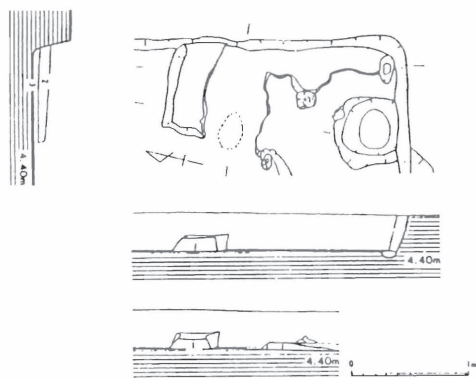
これらは、その多くが竪穴の壁を這うように煙道が作られたものである。これは実は日本にもあった。最近新聞紙上を賑わした滋賀県能登川町西ノ辻遺跡の例は4世紀初めと考えられ、同県では5世紀初めの栗東町辻・岩畑遺跡にもみられる。福岡県屋崎町在自下ノ原遺跡、岡垣町友田遺跡、



1. 慶州市月城垓字遺跡



2. 栗東町岩畑遺跡



3. 和歌山市田屋遺跡
第1図 横長煙道の例

神戸市郡家遺跡、和歌山市田屋遺跡では5世紀前半のものがある(第1図)。

この横長煙道のカマドは西日本の各地にわずかながら散見できるが、これらの地域の特性からみても「人」とともに渡来したものと考えられる。いわば直輸入のこのタイプはその後定着せずに終わる。

また筆者がO類としたもの(註2)——石野氏の提唱された「類カマド」と同じか(註3)——については、4世紀から各地にみられるが、その位置や遺存する構造からみて、後代にふつうにみられる平屋構造の住居内に作られる、いわゆる「へっつい」とは同一視できるものではない。

ともに炉の改良に影響を与え、カマドを生む背景となった可能性は残されているにせよ、つぎにいう普及型の原形にはほど遠いと言わざるを得ない。

3. 各地域の様相

いわゆる普及型の生い立ちを、大胆に推理してみた。前述の岩畑・田屋遺跡でもわかるとおり、壁内の袖部分は「ハ」字に開き、壁下には粘土を巻いている。横長の煙道を取り去り、垂直に煙道を立て直すとA類そのものである。横長の煙道は屋根構造に適さないため、結局は採用されなかったのである。

5世紀前半から中頃の様相をみると、そのことがなんとなくわかってくるのである。以下各地域の様相を概観していこう(第2図)。

九州地方

カマドが発見されているのは北九州のみである。

福岡県の資料としては125遺跡が紹介されている。前述した2遺跡は玄海灘に面した遠賀川下流にあり、その後この地域には6世紀後半までカマド例がみられない。つまり直輸入タイプはその周辺にまったく影響を与えることもなく、普及した痕跡もないことが窺えるのである。

カマドをもつ遺跡の7割以上は博多平野那珂川と樋井川流域および筑後川流域に集中し、5世紀前半の例は佐賀県基山町伊勢山遺跡も含んで、筑後川上流および支流に限定される。A類のほかにB1・2類が比較的多くみられるのも、この時期の特色であろう。

6世紀中頃からはC・D類が、後半には典型的

なE類が増加するが、7世紀に入るとなぜかほとんどのカマドがA類に戻る。

F類型集落(註4)とはいうと、浮羽町大口遺跡(6世紀中—後)以外は、7世紀末から8世紀後半を中心とする春日市御供田・小郡市津古生掛・甘木市松山・苅田町黒添赤木などの遺跡が散在するにすぎない。

佐賀県では鳥栖から多久地方にかけての筑紫山地南麓に遺跡が展開する。城原川上流域の神崎町上志波屋七の坪遺跡に5世紀中頃のカマドが現れ、その後この地域では7世紀代まで続く。5世紀後半には県中央、嘉瀬川上流域の大和町北畑遺跡にF類が、玄海灘地方では唐津市久里天園遺跡にA類がみられる。

基本的には6世紀中頃までA類、それ以後は確実にC・B1類となり、カマドそのものは7世紀代になくなる。

大分県の分布をみると北の三光村佐知遺跡、西の大分川流域大分市植田市遺跡に5世紀末のものが現れ、6世紀後半には筑後川上流域の玖珠地方にもみられるようになる。6世紀後半にはA→B・C類への変化が認められるが、例外的に玖珠町冷酒庵遺跡には7世紀後半代のA類型集落がある。

熊本県では、阿蘇山麓の大津町瀬田裏遺跡から6世紀前半から末にかけての大集落がみつまっている。40基をこすカマドの多くは石組でC・D類に属する。ほかには熊本平野以北地域に6世紀末から7世紀代の集落が10余例みられる。

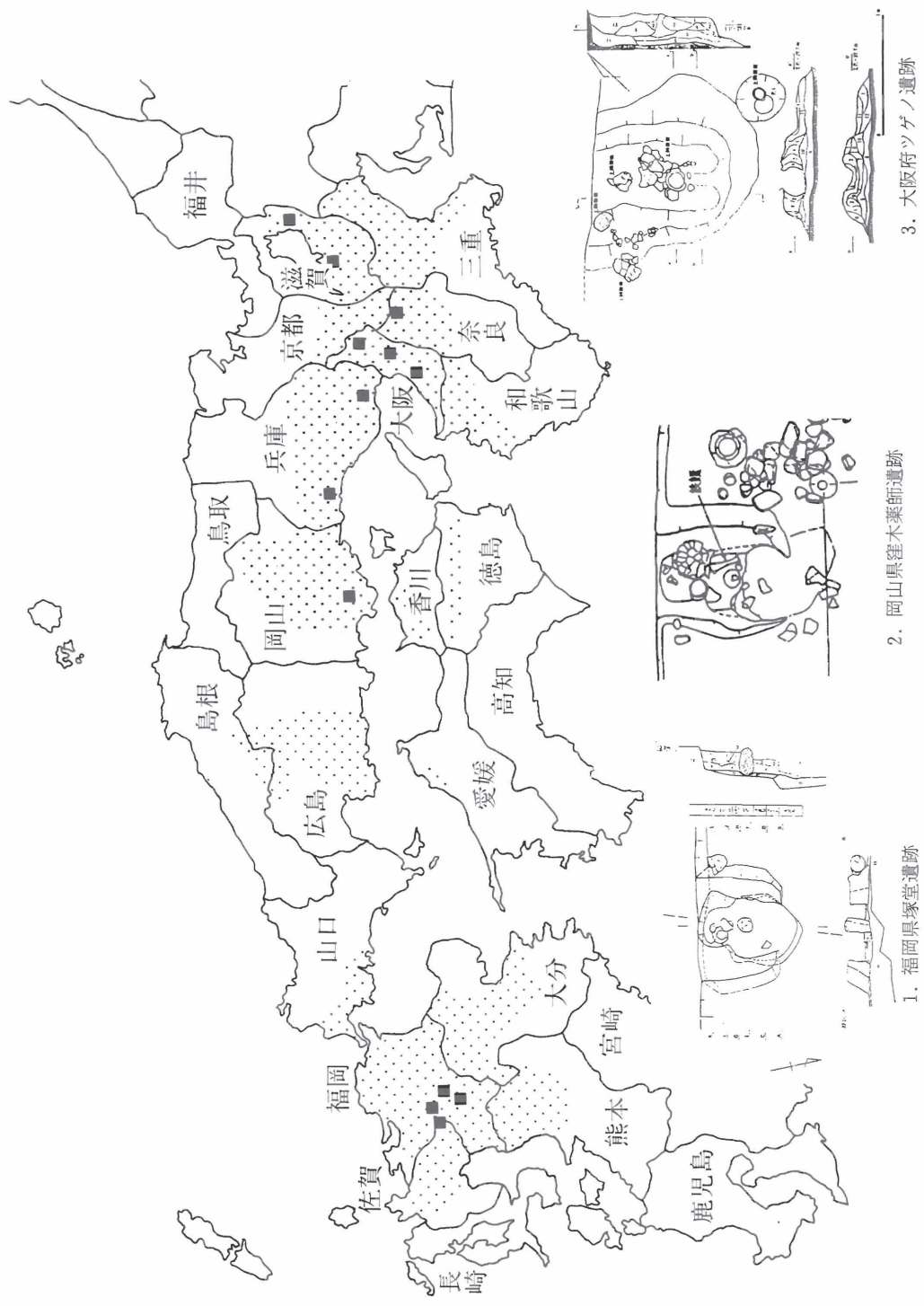
宮崎県では宮崎市浄土江遺跡に7世紀代の例があり、ほかには9世紀代にいくつか散見されるにすぎず、長崎・鹿児島・沖縄の各県には該当するものがない。

四国地方

調査例に乏しく、全部で30遺跡にすぎない。香川県では丸亀・善通寺周辺、愛媛県は松山周辺、徳島県の場合は吉野川流域に散見される。

四国最古の例としては、松山大学構内遺跡の隅A類で5世紀中頃、構造のはっきり捉えられたものとしては善通寺市稲木遺跡に後半のA類がある。5世紀も末になると松山市福音寺筋遺跡にB2・C類が現れる。

高知県唯一の香美郡の例は6世紀中頃のA類であるが、後半以降前述した地域では着実にBからD・E類へと変化する。



第2図 カマドの分布と初現期の例

F類型集落は香川県内にも認められ、6世紀後半から末期の坂出市下川津遺跡・善通寺市仲村廃寺、7世紀後半の高瀬町大門遺跡などが好例である。

中国地方

山口県長門から福井県若狭にいたる山陰地方は置竈が主流である。例外的に山口県秋芳町の中村（6世紀）・国秀遺跡（7－8世紀前）、島根県邑智郡内の今佐屋山（6世紀末）、長尾原・郷上（7世紀前）などの遺跡に作り付けの例がみられるが、いずれも山間地に立地する遺跡であることに山陽地方との関連を感じる。

これに対し瀬戸内海に面した山陽地方はいわゆるカマドが圧倒的である。

山口県では、5世紀前半に下関市秋根遺跡にA・D類が現れる。後半には下関市綾羅木郷、山口市小路、県東端の周東町奥ヶ原遺跡などにAまたはB類が展開する。

その後はA類を基本とするが、類例に乏しく、わずかに7世紀前半に石組のE類が山口市毛割遺跡にみられる程度である。

岡山県では、岡山市を中心として旭川と高梁川に挟まれた下流域に5世紀代の遺跡が集中する。前半にはAまたは隅A類が岡山市高塚、総社市窪木薬師遺跡に、後半では総社市樋本・御津原遺跡などその周辺地域にも拡大し、岡山市百間川原尾島遺跡には末期にC・D類も現れる。

6世紀後半に至って、県北の美作地方に津山市大開・大畑遺跡のF類や同東蔵坊のB2類などがみられる。

広島県での分布は、備後の三次盆地・安芸の広島東部に集中しており、カマドを持つ集落は6世紀中頃から7世紀前半に限られる。C・D類が多く、F類型集落も三次市松ヶ迫・高峰、東広島市平木池遺跡などを好例として両地域に多く認められる。

近畿地方

兵庫県播磨地方では、西の太子町川島遺跡、東の加東郡家原遺跡に5世紀前半の例が、また明石市周辺に6世紀前半の遺跡が集中するという。

摂津地方に属する郡家遺跡には5世紀中頃の横長煙道のカマドが存在したことはすでに述べたが、同じ神戸市宅原・生田遺跡にはA類を思わせるものも並行してあったようである。6世紀代には丹

波地方にも広がるが、やはりA類が主流である。

大阪府のカマドをもつものとしては合計45遺跡が取り上げられている。5世紀前半から中頃にかけて南河内郡太子町伽山、高槻市ツゲノ、堺市小阪遺跡といったぐあいに府全域に現れ、一部の遺跡でB類もみられるが、基本的にはA類がほとんどである。

6世紀初めに岸和田市三田遺跡にC・D類が登場し、その後はこの類型が確実に増加しつつ、7世紀前半代で堅穴そのものがなくなるようである。

置竈も5世紀初めから7世紀末までの間に40余遺跡が報告されている。とくに難波宮下層からは多くの置竈が出土し、「堅穴住居は5世紀末から6世紀初めのもので、残存状況の良いものには竈（筆者のいうカマド）が見られる。6世紀前半には掘立柱建物に移行しており、置竈の出現はこれと関連するのかもしれない。」（註5）と上屋構造の問題にまでに迫っている。

奈良県では、5世紀前半には大和盆地北縁の奈良市長谷遺跡や中央部広陵町箸尾遺跡に最古のA・B2類が現れるが、カマド・置竈ともに分布の中心は盆地南縁である。5世紀末の桜井市カタソバ遺跡にはB1・C・F1類が共存し、その後C類を主流として7世紀初めには堅穴自体が消滅する。

滋賀県では、湖東方面に遺跡が集中している。前述の辻・岩畑遺跡には、ほかに5世紀前半にA類がみられ、後半の安土町市子遺跡などでは、すでにC・F2類がみられる。

長浜市柿田遺跡では6世紀初めから7世紀初めの大集落が調査されており、A→C→D→E・F類への変化がたどれる。さらに湖北部では8世紀末までカマドが残ったようである。

本県は6世紀代を中心に置竈やミニチュアの出土例が並存してかなりみられることも、大阪府・奈良県とともに特徴的である。

和歌山県では、紀ノ川流域に分布する。5世紀中頃から下流の和歌山市音浦・吉田遺跡、上流の橋本市市脇遺跡にA類が、またその直後から両地域にF類もみられる。6世紀代の例はあまり知られていないが、A・C類が散見できる。

京都府からは、「青野型住居」が提起された。これは堅穴の壁の一隅を掘り残し、そこにカマド煙道を横に這わせるタイプである。和歌山市田屋遺跡例に近いが、これは6世紀後半に比定される。

三重県伊勢地方の亀山市山城遺跡では5世紀中頃から16棟の竪穴が発見されたが、いずれもA類である。その後も伊勢北部を中心にカマドがみられ、6世紀代にいたって初めて南部にも広がる。

伊賀地方では5世紀中頃の名張市赤目壇遺跡にA類が、同柏原遺跡に完成された形のD類がある。5世紀末から6世紀後半には上野地域にもみられるようになるが、本県では6世紀後半代でカマドの構築は終わる。

4. おわりに

最後に質疑応答のなかから得られた、会全体の了解——その場の雰囲気——をまとめておこう。

まず、横長煙道タイプは中国大陸の甕形明器に由来し、朝鮮半島で「オンドル」などの影響を受けて招来された可能性がある。日本には4世紀に「人」とともに渡ってきたが、なぜか風土に馴染まず、定着せずに終わる。

我々が目にするポピュラーなタイプ（筆者のいうA類をイメージしながら）は、日本列島全域で5世紀中頃に形づくられたとの考えが、いまのところ共通した見解である。

註

1 「古墳時代の甕を考える」埋蔵文化財研究会 1992

「古墳時代の甕を考える—福岡県版—」埋蔵文化財研究会第32回福岡県研究会世話人会 1992

2 「古代東国のカマド」

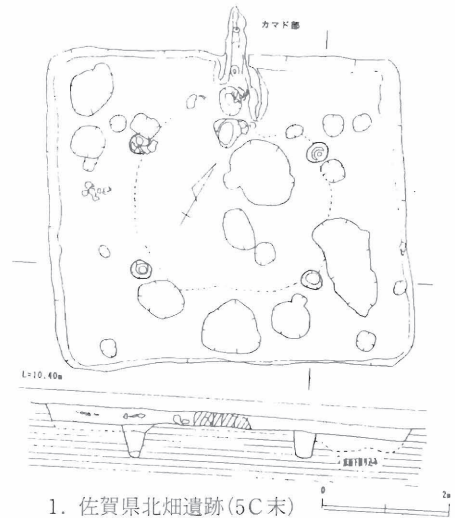
谷『千葉県文化財センター研究紀要7』（財）千葉県文化財センター 1982

以下、類型は本論に準ずる。

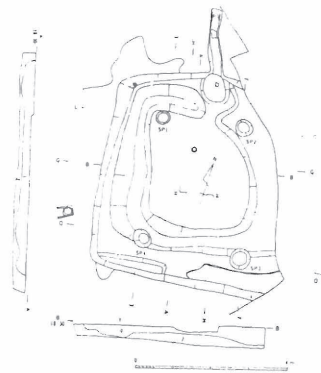
3 「考古学から見た古代日本の住居」石野博信『家』 1976

4 「所謂「F類カマド」型の集落(上総西部編)」谷『研究連絡誌第29号』（財）千葉県文化財センター 1990

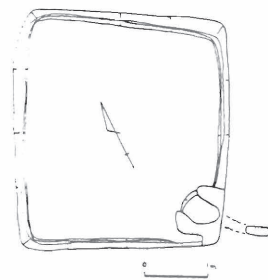
5 註1第一分冊605P 資料作成者 南 秀雄



1. 佐賀県北畑遺跡(5C末)



2. 香川県大門遺跡(7C後)



3. 和歌山県慈尊院遺跡(5C末)

第3図 F類カマドの例